身辺の幼児発音随想

藤原与一

A MEMORANDUM ON BABY'S SOUNDS

Yoichi FUJIWARA

2歳になる前の女児が，かなり長い期間，「オシャマ」〔oʃama〕ということばを口にしたものである。何のことだろうと，まわりのおとなどもはいぶかった。「ごちそうさま」のことかな，などというものもあった。

つねづね，私は，この女児のことばを書きつけるのに，その文表現を，Ⓐじるしのもとに書くことにしていた。さて，マルにAを書くのを見ると，かの女はすぐ，"オシャマ"と言うのであった。(朝，だいてあるいていると，ふと，"オシャマ"と言うことがあった。)

満2歳になってからのある朝，私の書いたⒶをゆびさして，この児は，"オシサマ。オシサマ"と言った。「オシサマ」が〔oʃiʃama〕に近かった。この時，また，この児は，

"オシシャマ　キラキラ，……
ミンナ　ゲンキー。
オシシャマ　……"

と，歌うようなことを言った。

〔oʃama〕は「お日さま」のことであったが，はじめ，Ⓐを見て「オシャマ」と言うのにはなやまされた。幼児がこのしるしを見て「お日さま」を思うことなどは，想像もおよばなかったのである。

○

以下は，もうひとりの女児，Nのことである。

やはり満2歳ころのこと，「台ふき」を「ダイクキ」と言った。(〔Fu〕>〔ku〕)——この発音の期間は，かなり長かったように思う。

このころ，「エプロン」のことを，しきりに，「エピロン」と言った。〔epu〕ではない〔epi〕の発音，「エピロン」を聞くたびに，私は，いかにももっともな発音だと，その自然音の美しさに感じ入った。そういえば，「ダイフキ」ならぬ「ダイ kuki」も，もっともな発音である。——おとなはこれを音訛と言うけれども。

○

満2歳でのことである。Nは，私に，「書くのはすんだ（おわった）か。」と問うのに，

"スンダア　ネ。オヂーチャン　スンダア　ネ。"

との言いかたをした。「ダア　ネ」の発音はめずらしいものだった。（2歳1カ月後，この種のものを聞くことはない。じつは，「ダア　ネ」聴きとりのカードは，一枚だけである。）上の「ダアネ」の言いかたは，おとな流の表現音声に引きあてて言えば，プロミネンスとも言えるものか。自然にとはいえ，また偶然的瞬間的にもせよ，幼児に，こんなこともおこりうるのか。

私が，さっそく，別の紙に上の発言を書きつけはじめると，

"マダー　ネ。"（まだなの？）

と，問うた。この時のイントネーションは，下降調の一元で，「ダア　ネ」のかたちは見えていない。しかし，「マダー」の長呼にも，私はやはり興味を感じる。

以上の時は，どうも，「ダア（ダー）」の出る，あるふしぎな時であったようだ。

○

Nの2歳3〜4カ月の生活の中から，あれこれの発音をとり出してみる。

オハヨ　ゴ　マイ　マス。（お早うございます。）

オカナナ　チョーダイ。（おさかなをちょう

だい。)

××カンカン（広電会館）

コモノリ（コイ モドリなども）ガ ミエタ。

ハマーキ（歯みがき）

オックリ（おくすり）

オッテモノ（おつけもの）

モー ナーッ ター。（もう治った？）

「お客さま」というのは，まさに，言いにくいことばのようである。「オチャツュ……」などともなりやすい。ていねいに言ったばあいにである。口ばやくは，四拍の発音にもなる。

テレビでおぼえた「たまずさのおんりょう」は，〔tatadzutsamonoŋjo:〕であった。

けさのこと，やってきて，なにげなく語ったことばは，

“ナタテナイ（なさけない）ネー。ナタテナイ ヨ。”

であった。

幼児の発音を，‘幼児音’などと言って，軽く見すごしておくことはできない。

幼児発音は，人間発音の機構を，縦横に考えさせてくれる。 (59・6・2)